九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

現代朝鮮語における漢字語形態素の語彙的濃音化 ：漢字語接尾辞 ’-cek’（的）を対象に

辻野, 裕紀
九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門・言語教育学講座

https://doi.org/10.15017/7153225

出版情報：言語科学. 51, pp.31-42, 2016-03-31. The Faculty of Languages and Cultures, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

現代朝鮮語における漢字語形態素の語彙的濃音化

—漢字語接尾辞'-cek'(的)を対象に—

辻野 裕紀(つじの・ゆうき)

1. 緒言

本稿は，現代朝鮮語における〈漢字語形態素の語彙的濃音化〉，就中，漢字語接尾辞'-적'(的)[1]の語彙的濃音化(lexical tensification)について論ずるものである.

2. 問題の所在と研究の方法

現代朝鮮語の漢字語においては，第 2 音節以降の形態素の平音の onset が濃音(喉頭化音)で実現することがある. 以下例を挙げる[2]:

정가[정까]【定價】, 여권[여권]【旅券】, 문제점[문제쩜]【問題點】, 수도권[수도권]【首都圈】,
염증[염쯩]【炎症】, 방사선과[방사선꽈]【放射線科】, 헌법[헌뻡]【憲法】, 위병[위뼝]【胃病】,
안전성[안전썽]【安全性】, 수령증[수령쯩]【受領證】

上の例から分かるように，漢字語のこうした濃音化は，口音以外の子音(鼻音，流音)や母音の直後でも生起しており，〈音韻論的現象〉ではなく〈形態音韻論的現象〉と目さねばならない[3]. 茲で謂う〈形態音

---

[1] なお，서재극(1970:95-100)，김광해(1995:14)，門脇誠一(2004:4)，이한섭(2014:693)などによれば，朝鮮語の'-적'(的)は日本語の「-的」に由来するものである. 김광해(1995:14)によれば，接尾辞'-적'(的)は，『老乞大』や『朴通事』のような白話文資料で使用された例を除くと，開化期以前の朝鮮語にはほとんど見られないものであり，また，서재극(1970:95)によれば，朝鮮語で'-적'(的)がよく用いられるようになったのは，1908 年に発刊された雑誌『소년』からである. 因みに，日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編集(1972;2001:604)によれば，日本語の「-的」は，中国語の助辞の用法にならって，明治初期の翻訳文のなかで，英語の-tic などの形容詞的な語の訳語として二字の漢語につけて用いられ出したのが嚆矢である. なお，日本語の「-的」と朝鮮語の'-적'の用法は非常によく似ているが，성공적(lit. 成功的)など，朝鮮語には日本語では用いられないものも少なからず存在する. また，塚本秀樹(2012:309-311)も指摘するように，朝鮮語の'-적'は日本語の「-的」と異なり，語よりも大きい単位である節・文と結び付くことができない. 例えば，「「そこまでやるか」的趣味」，「疑わしきは罰する的な報道」の如き日本語は朝鮮語に直訳できない. さらに，管窺の限り，朝鮮語の'-적'には，「取的」(力士の最下位の者の称)，「泥的」(泥棒を軽んじていう語)などのように，人名や人を表す語(の一部)に付けて，親しみや軽蔑の気持ちを込めて呼ぶ用法は見当たらない. 屈折論的には，日本語の「…的」は形容動詞的であるのに対し(ただし昭和初期ぐらいまでは「…的の～」の例がありこのほうが古い用法と思われる)，朝鮮語の'…적'は名詞的である(ただし否定形は形容詞的でもあり得る). 菅野裕臣他(1988;1991:737,1018)や菅野裕臣(2006:165)は，'…적'のように，裸の形と述語形を持ち，かつ限られた助詞しかつきえない名詞を「形容名詞」と呼んでいる. 形容名詞は「欠如的な完全名詞」の下位範疇である.

[2] 例は，菅野裕臣(2004:22-24)の語例の一部より引用. [ ]内はハングルによる発音表記，【 】内は漢字表記である. また，《 》内は日本語訳である.

[3] なお，口音の直後の平音は無条件に濃音と交替する. これは音韻論的平面で生じる濃音化であり，本稿が研究の俎上に載せる〈漢字語形態素の語彙的濃音化〉とは峻別されるべきものである.

韻論的〉とは,「音韻現象に形態論的側面が関与するために,純粋な音韻論的平面(план)内では十全たる記述が不可能なもの」を指す.本稿では,斯かる濃音化を〈漢字語形態素の語彙的濃音化〉[4]と称することにする.

車美愛(1996b)では,語彙的濃音化が生じる漢字語形態素を「濃音化字音素」と呼び,濃音化字音素を次の3種に分類している(ibid.に従い漢字で表記する):

Ⅰ類:語の構造の如何にかかわらず濃音化を生じる字音素
e.g. 價, 間, 件, 格, 科, 權, 券, 圈, 法, 數, 字, 點, 症, 證

Ⅱ類:独立の語と結合する場合にのみ濃音化する字音素
e.g. 課, 級, 氣, 宅, 房, 病, 床, 性, 税, 狀, 帳, 調, 罪

Ⅲ類:独立の語と結合する場合には濃音化せず,それ以外の場合に濃音化を生じる字音素
e.g. 的

厳密に言えば,こうした濃音化字音素は,各々「構造の如何にかかわらず常に」,「自立的要素と結合する場合」,「非自立的要素と結合する場合」といった各条件を満たしていさえすれば必ず濃音化が生じるとは限らず,其実,上の分類はある種の傾向に過ぎない.そうした点に鑑みれば,濃音化字音素は,〈濃音化志向漢字語形態素〉とでも称すのが穏当であろう.

ところで,上の三分類のうち,Ⅲ類に属するものは惟独'-적'(的)のみであり,分布の面で特異な様相を呈している.また,言語事実を具に観察すると,話者によっては,自立的要素と結合する際にも'-적'(的)の頭音は濃音化を起こすことがある[5].例えば,菅野裕臣他(1988;1991:737)は,정신적《精神的》が[정신적]とも[정신쩍]とも発音されるなど,'-ㄴ'の後では'-적'の語彙的濃音化が生じることを指摘している.また,배주채(2003:279)は,若い世代においては,개인적《個人的》が[게인쩍],모범적《模範的》が[모범쩍],가정적《家庭的》が[가정쩍]と発音されるなど,3 音節以上の語で'-ㄴ,-ㅁ,-ㅇ'の後でも'-적'の語彙的濃音化が広く生じることを洞見している.実際,[정신쩍],[게인쩍],[모범쩍],[가정쩍]の如き発音がありうることは,朝鮮語母語話者乃至朝鮮語に深く肉薄した者にとっては経験的に自明であろう.それでは,こうした濃音化した発音は,若いソウル方言話者の中でどの程度用いられているのだろうか.また,自立的要素との結合において,母音の後では'-적'の語彙的濃音化は絶対に生じないのだろうか.さらに,非自立的要素との結合にあっては,'-적'の語彙的濃音化は必ず起きると断じてよいのだろ

[4] 車美愛(1996b)は「鳴音後濃音化」,辻野裕紀(2015:39)は「漢字語における例外的(語彙的)な濃音化」と呼んでいる.「個別的濃音化」と称してもよいかもしれない.「漢字語形態素」という概念とその性質については,辻野裕紀(2013:17-20)を参照されたい.〈漢字語形態素の語彙的濃音化〉については,車美愛の一連の研究(車美愛(1996b, 1997, 1999, 2004)など)も参照.

[5] 朝鮮語の学習書である前田真彦(2001:143-144)は,'-적'の発音について,「法則がありそうで,ない.いちいち覚えるしかない」と述べている.発音の規則性が明らかになっていないことは,言語教育上の問題としても屡々立ち現れる.同時代最大の韓国の朝鮮語辞書である국립국어연구원(1999)にも,'-적'の発音についての言及はない.

うか.

このような, 個人差が存在する可能性のある音韻上の問題群を記述するにあたって, インフォーマント調査の重要性は拳拳服膺されねばならないが, 論者の内省や辞書的規範にのみ依拠する既存の研覈では, 斯かる点が十分に考慮されていない. そこで, 筆者は, 若年層(20代)ソウル方言話者全15名を対象に, '-적'(的)の発音についてのインフォーマント調査を行なった. 筆者が事前に準備した, 後行要素を'-적'(的)とする漢字語全 172 語を, インフォーマント諸氏に所謂〈読み上げ式〉[6]で発音してもらい, '-적'が[적]と発音されるか, 語彙的濃音化を起こし[쩍]と発音されるかについて調べた. 172 語のうち, 28 語は〈1 音節+-적〉, 136 語は〈2 音節+-적〉, 8 語は〈3 音節+-적〉という構造のものであり, いずれも派生語(derived word)である[7]. 以下,「先行要素の音節数」および「先行要素の末音」に着目しつつ, 調査結果を解析していく.

3. 分析

3.1. 〈1 音節+-적〉

〈1 音節+-적〉という構造の派生語については, 全 28 語を調査した. 先行要素の末音が母音の語, 鼻音の語, 流音の語に分けて, 各々見ていこう.

まず, 先行要素の末音が母音の語の結果は次の通りである:

先行要素の末音が母音(8 語)

語(ハングル表記)	語(漢字表記)	'-적'の語彙的濃音化実現率[8]
내-적	内的	100.0%
미-적	美的	100.0%
사-적	私的	100.0%
수-적	數的	100.0%
외-적	外的	100.0%
지-적	知的	100.0%
시-적	詩的	93.3%
사-적	史的	73.3%

上の表から, 先行要素の末音が母音の〈1 音節+-적〉では, 基本的に'-적'の語彙的濃音化が起きることが分かる[9]. 語彙的濃音化平均実現率は 95.8%である. すべての語の語彙的濃音化実現率が 50%を

[6] 「読み上げ式とは, 紙に書いた単語や文をそのまま, あるいは方言に直して読み上げてもらう方式の調査である.」(木部暢子 2007:33)

[7] 調査語彙は'-적'が接尾辞(suffix)として用いられているものに局限しており, 원적《遠くの的》, 표적《標的》などといった語は含まれない.

[8] 数値は小数第二位を四捨五入してある. 簡単のため「約」はつけない. 他の表も同様.

[9] 唯一사-적《史的》の語彙的濃音化実現率が相対的に低いのが目につくが, その理由としては, 語彙的濃音化が生じない역사-적《歴史的》の影響, あるいは同音異義語の사-적《私的》との弁別の企図などを考えうる. 本調査のみからは断定的なことは言えない.

上回っている.

次に, 先行要素の末音が鼻音の語の結果は次の通りである:

先行要素の末音が鼻音(18 語)

語(ハングル表記)	語(漢字表記)	'-적'の語彙的濃音化実現率
공-적	公的	100.0%
광-적	狂的	100.0%
단-적	端的	100.0%
동-적	動的	100.0%
병-적	病的	100.0%
심-적	心的	100.0%
양-적	量的	100.0%
전-적	全的	100.0%
점-적	點的	100.0%
성-적	性的	93.3%
신-적	神的	93.3%
암-적	癌的	93.3%
영-적	靈的	93.3%
인-적	人的	93.3%
정-적	靜的	93.3%
종-적	縱的	93.3%
횡-적	横的	86.7%
선-적	線的	73.3%

上の表から, 先行要素の末音が鼻音の〈1 音節+-적〉でも, '-적'の語彙的濃音化が非常に起きやすいことが分かる. 語彙的濃音化平均実現率は 95.2%である. すべての語の語彙的濃音化実現率が 50%を上回っている.

先行要素の末音が流音の語の結果は次の通りである:

先行要素の末音が流音(2 語)

語(ハングル表記)	語(漢字表記)	'-적'の語彙的濃音化実現率
물-적	物的	100.0%
질-적	質的	100.0%

上の表から，先行要素の末音が流音の〈1 音節＋-적〉でも，'-적'の語彙的濃音化が極めて起きやすいことが分かる[10].

3.2. 〈2 音節＋-적〉

〈2 音節＋-적〉という構造の派生語については，全 136 語を調査した．先行要素の末音が母音の語，鼻音の語，流音の語に分けて，各々見ていこう．

まず，先行要素の末音が母音の語の結果は次の通りである:

先行要素の末音が母音(40 語)

語(ハングル表記)	語(漢字表記)	'-적'の語彙的濃音化実現率
가시-적	可視的	0.0%
강제-적	强制的	0.0%
거시-적	巨視的	0.0%
결사-적	決死的	0.0%
경제-적	經濟的	0.0%
고무-적	鼓舞的	0.0%
공개-적	公開的	0.0%
구체-적	具體的	0.0%
국제-적	國際的	0.0%
근대-적	近代的	0.0%
기계-적	機械的	0.0%
논리-적	論理的	0.0%
단계-적	段階的	0.0%
대대-적	大大的	0.0%
대체-적	大體的	0.0%
대표-적	代表的	0.0%
독자-적	獨自的	0.0%
동시-적	同時的	0.0%
문화-적	文化的	0.0%
물리-적	物理的	0.0%
미시-적	微視的	0.0%
민주-적	民主的	0.0%
반사-적	反射的	0.0%
보수-적	保守的	0.0%

[10] なお，流音の直後における'-적'の濃音化は，所謂〈流音後濃音化〉の一種でもある．〈複音節＋-적〉の場合も同様である．流音後濃音化については，車美愛(1996a)，辻野裕紀(2016)を参照．

비교-적	比較的	0.0%
사무-적	事務的	0.0%
상대-적	相對的	0.0%
세계-적	世界的	0.0%
세부-적	細部的	0.0%
역사-적	歷史的	0.0%
예외-적	例外的	0.0%
원시-적	原始的	0.0%
육체-적	肉體的	0.0%
일회-적	一回的	0.0%
천재-적	天才的	0.0%
추가-적	追加的	0.0%
특수-적	特殊的	0.0%
파괴-적	破壞的	0.0%
필사-적	必死的	0.0%
필수-적	必須的	0.0%

上の表から分明なように，先行要素の末音が母音の〈2 音節＋-적〉では，'-적'の語彙的濃音化は悉皆生じない．

次に，先行要素の末音が鼻音の語の結果は次の通りである：

先行要素の末音が鼻音（75 語）

語（ハングル表記）	語（漢字表記）	'-적'の語彙的濃音化実現率
정신-적	精神的	73.3%
대중-적	大衆的	53.3%
명령-적	命令的	40.0%
내성-적	內省的	33.3%
양심-적	良心的	33.3%
외향-적	外向的	33.3%
공통-적	共通的	26.7%
내향-적	內向的	26.7%
모성-적	母性的	26.7%
반성-적	反省的	26.7%
산문-적	散文的	26.7%
여성-적	女性的	26.7%

영웅-적	英雄的	26.7%
잠정-적	暫定的	26.7%
정상-적	正常的	26.7%
개성-적	個性的	20.0%
개인-적	個人的	20.0%
모순-적	矛盾的	20.0%
미신-적	迷信的	20.0%
외면-적	外面的	20.0%
위생-적	衛生的	20.0%
인간-적	人間的	20.0%
일방-적	一方的	20.0%
일원-적	一元的	20.0%
전진-적	前進的	20.0%
절망-적	絶望的	20.0%
가정-적	家庭的	13.3%
고전-적	古典的	13.3%
낭만-적	浪漫的	13.3%
내면-적	內面的	13.3%
대량-적	大量的	13.3%
모범-적	模範的	13.3%
성공-적	成功的	13.3%
시험-적	試驗的	13.3%
일관-적	一貫的	13.3%
일본-적	日本的	13.3%
전면-적	全面的	13.3%
가공-적	架空的	6.7%
관능-적	官能的	6.7%
만성-적	慢性的	6.7%
모험-적	冒險的	6.7%
사변-적	思辨的	6.7%
생산-적	生産的	6.7%
수동-적	受動的	6.7%
시간-적	時間的	6.7%
실증-적	實證的	6.7%
실험-적	實驗的	6.7%
야만-적	野蠻的	6.7%

우연-적	偶然的	6.7%
이론-적	理論的	6.7%
일면-적	一面的	6.7%
일반-적	一般的	6.7%
정통-적	正統的	6.7%
주관-적	主觀的	6.7%
초인-적	超人的	6.7%
환상-적	幻想的	6.7%
희생-적	犧牲的	6.7%
감동-적	感動的	0.0%
감명-적	感銘的	0.0%
객관-적	客觀的	0.0%
결정-적	決定的	0.0%
경쟁-적	競爭的	0.0%
고정-적	固定的	0.0%
공간-적	空間的	0.0%
공동-적	共同的	0.0%
극단-적	極端的	0.0%
기본-적	基本的	0.0%
남성-적	男性的	0.0%
능동-적	能動的	0.0%
독단-적	獨斷的	0.0%
봉건-적	封建的	0.0%
살인-적	殺人的	0.0%
중점-적	重點的	0.0%
직선-적	直線的	0.0%
집단-적	集團的	0.0%

上の表から，先行要素の末音が鼻音の〈2 音節＋-적〉では，全体的な傾向として'-적'の語彙的濃音化が起きにくいことが分かる．語彙的濃音化平均実現率は 13.4%である．75 語中，73 語(97.3%)の語彙的濃音化実現率が 50%を下回っている．2 章で言及した，배주채(2003:279)の 3 音節以上の語において「'-ㄴ, -ㅁ, -ㅇ'の後でも'-적'の語彙的濃音化が広く生じる」という指摘に背馳する数値と言える．

なお，정신-적《精神的》，대중-적《大衆的》のように，濃音化実現率が突出して高いものもごく一部に見られるが，現段階では例外的という他なく，音韻論的，形態論的，意味論的な視座からその原因を推し量ることはできない．

先行要素の末音が流音の語の結果は次の通りである:

先行要素の末音が流音(21 語)

語(ハングル表記)	語(漢字表記)	'-적'の語彙的濃音化実現率
개괄-적	概括的	100.0%
고질-적	痼疾的	100.0%
노골-적	露骨的	100.0%
일률-적	一律的	100.0%
기술-적	記述的	93.3%
우발-적	偶發的	93.3%
일괄-적	一括的	93.3%
개별-적	個別的	86.7%
독일-적	獨逸的	86.7%
획일-적	劃一的	86.7%
건설-적	建設的	80.0%
계절-적	季節的	80.0%
능률-적	能率的	80.0%
법률-적	法律的	80.0%
산발-적	散發的	73.3%
예술-적	藝術的	66.7%
동물-적	動物的	60.0%
직설-적	直說的	46.7%
실질-적	實質的	26.7%
물질-적	物質的	13.3%
악질-적	惡質的	13.3%

上の表から, 先行要素の末音が流音の〈2 音節+-적〉では, 全体的な傾向として'-적'の語彙的濃音化が起きやすいと言ってよい. 語彙的濃音化平均実現率は74.3%である. 21 語中, 17 語(81.0%)の語彙的濃音化実現率が 50%を上回っている.

語彙的濃音化実現率が 50%を下回っている語は, 직설-적《直説的》, 실질-적《実質的》, 물질-적《物質的》, 악질-적《悪質的, 悪質な》の 4 語だが, 興味深いことに, これらは総て先行要素に濃音を含んでいる. 反対に, この 4 語以外は, いずれも先行要素に濃音を含まない. この事実は, 先行要素における濃音の存在が, '-적'の語彙的濃音化を防遏していることを意味しており, 所謂〈異化〉(dissimilation)の一種であろう[11]. 筆者は既に辻野裕紀(2016)で, 〈流音後濃音化〉(Post Liquid Tensification:PLT)一般に

[11] 배주채(2003:276)も斯かる現象を異化と見做している.

ついて，先行要素に濃音を含む場合には流音後濃音化が起きにくいことを指摘したが[12]，'-적'の個別ケースでもこのことは当てはまると言えそうである．

3.3. 〈3 音節＋-적〉

〈3 音節＋-적〉という構造の派生語については，全 8 語を調査した．先行要素の末音が母音の語，鼻音の語，流音の語に分けて，各々見ていこう．

まず，先行要素の末音が母音の語の結果は次の通りである：

先行要素の末音が母音（1 語）

語（ハングル表記）	語（漢字表記）	'-적'の語彙的濃音化実現率
대규모-적	大規模的	0.0%

1 語のみなので，はっきりとしたことは断じえないが，語彙的濃音化実現率は 0.0%であり，濃音化は生じないと言えそうである．

次に，先行要素の末音が鼻音の語の結果は次の通りである：

先行要素の末音が鼻音（5 語）

語（ハングル表記）	語（漢字表記）	'-적'の語彙的濃音化実現率
초자연-적	超自然的	60.0%
현상론-적	現象論的	60.0%
존재론-적	存在論的	46.7%
초인간-적	超人間的	40.0%
무조건-적	無條件的	0.0%

上の語群の語彙的濃音化平均実現率は 41.3%である．語によって語彙的濃音化の生じやすさにばらつきがあり，무조건-적《無条件的，無条件の》以外は個人差も顕著である．무조건-적以外は，배주채(2003:279)の 3 音節以上の語において「'-ㄴ，-ㅁ，-ㅇ'の後でも'-적'の語彙的濃音化が広く生じる」との指摘に吻合する結果と言える．

先行要素の末音が流音の語の結果は次の通りである：

[12] なお，辻野裕紀(2016)では，流音後濃音化が後行要素に濃音を含む場合にも起きにくいことを指摘したが，これは日本語における連濁（sequential voicing）のありようとよく似ている．日本語には合成語の後行要素に濁音が含まれる場合には連濁を起こさないという制約があり，これを〈ライマンの法則〉（Lyman's Law）と称す（ただし「なわばしご」の如き例外もなくはない）．日本語の連濁については，高山倫明(2012:105-127)などを参照．

先行要素の末音が流音(2 語)

語(ハングル表記)	語(漢字表記)	'-적'の語彙的濃音化実現率
신경질-적	神經質的	86.7%
다혈질-적	多血質的	40.0%

上の語群の語彙的濃音化平均実現率は 63.4%であるが, 調査語彙が 2 語のみで, この数値自体にはあまり意味がない. 신경질-적《神経質的, 神経質な》の語彙的濃音化実現率は 86.7%とかなり高く現れているのに対し, 다혈질-적《多血質的, 血の気の多い》のそれは 40.0%と低めに現れている. 後者の語彙的濃音化実現率が低いのはおそらく先行要素に濃音を含むためで, 3.2.で見た직설-적《直説的》, 실질-적《実質的》, 물질-적《物質的》, 악질-적《悪質的, 悪質な》が濃音化を起こしにくいのと軌を一にするものである.

4. 結言

茲まで, 若年層ソウル方言話者 15 名をインフォーマントとし, 漢字語接尾辞'-적'(的)の語彙的濃音化の稽査を行なってきた. 最後に, 本稿の梗概を簡単に述べておく.

まず, 〈1 音節+-적〉という構造においては, 先行要素の末音を問わず, '-적'は語彙的濃音化を極めて起こしやすい.

次に, 〈2 音節+-적〉という構造においては, '-적'の語彙的濃音化は先行要素の末音と相関関係があると言いうる. すなわち, '-적'の語彙的濃音化は, 先行要素の末音が母音の場合には悉皆生じず, 鼻音の場合には語によって生じやすいものも散見されるものの全体的な傾向としては生じにくい. また, 先行要素の末音が流音の場合には一体に生じやすいが, 先行要素に濃音を含む場合には異化作用により, 語彙的濃音化が防遏されやすい.

〈3 音節+-적〉という構造においても, '-적'の語彙的濃音化は先行要素の末音と相関関係があるものと思料される. まず, 先行要素の末音が母音の場合には語彙的濃音化が生じない. 次に, 鼻音の場合には語毎の逕庭や個人差が観察され, 本調査データのみから明確な結論を下すのは困難である. 流音の場合には基本的に語彙的濃音化が生じやすいと推察されるが, 〈2 音節+-적〉と同じく, 先行要素に濃音を含む場合には異化作用により, 生じにくくなる.

なお, 本研究は前述の通り, 〈読み上げ式〉による調査に基づいており, 実際の言語事実と聊か乖離している可能性も否定できない. また, 2 章で概見したように, 現代朝鮮語には, '-적'(的)以外にも語彙的濃音化を引き起こす漢字語形態素が数多存在する. 〈濃音化志向漢字語形態素〉をめぐる, より体系的かつ包括的なさらなる研覈が翹望される.

参考文献

門脇誠一(2004)「日本語と韓国語は「言語連合?」をなすか」,『月刊言語』33-9, 東京:大修館書店.
菅野裕臣(2004)『朝鮮の漢字音の話』, 千葉:神田外語大学韓国語学科.
菅野裕臣(2006)「朝鮮語の形態論的単位について」,『韓国語学年報』2, 千葉:神田外語大学韓国語学会.

菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕策・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編(1988;1991)『コスモス朝和辞典 第2版』, 金周源・徐尚揆・浜之上幸協力, 東京:白水社.
木部暢子(2007)「調査方法を選ぶ」, 小林隆・篠崎晃一編『ガイドブック方言調査』, 東京:ひつじ書房.
高山倫明(2012)『日本語音韻史の研究』, 東京:ひつじ書房.
車美愛(1996a)「漢字語の濃音化 —側音後濃音化の場合—」,『人文学論集』14, 大阪:大阪府立大学人文学会.
車美愛(1996b)「現代韓国語の鳴音後濃音化について」,『大阪府立大学紀要(人文・社会科学)』44, 大阪:大阪府立大学.
車美愛(1997)「現代韓国語の鳴音後濃音化について(Ⅱ)」,『大阪府立大学紀要(人文・社会科学)』45, 大阪:大阪府立大学.
車美愛(1999)「Ⅱ類・Ⅲ類の濃音化字音素 —「床」,「性」,「税」,「状」,「帳」,「調」,「罪」,「的」の場合—」,『人文学論集』17, 大阪:大阪府立大学人文学会.
車美愛(2004)「濃音化字音素の分類と特徴」,『人文学論集』22, 大阪:大阪府立大学人文学会.
塚本秀樹(2012)『形態論と統語論の相互作用 —日本語と朝鮮語の対照言語学的研究』, 東京:ひつじ書房.
辻野裕紀(2013)「言語形式の自立性と音韻現象 —現代朝鮮語の〈n 挿入〉を対象として—」,『朝鮮学報』229, 天理:朝鮮学会.
辻野裕紀(2015)「現代朝鮮語における言語規範と認識度 —いわゆる〈saisios〉を対象に—」,『韓国朝鮮文化研究』14, 東京:東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室.
辻野裕紀(2016)「現代朝鮮語の漢字語〈流音後濃音化〉浅析」,『韓国朝鮮文化研究』15, 東京:東京大学大学院人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室.
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編集(1972;2001)『日本国語大辞典 第二版 第九巻』, 東京:小学館.
前田真彦(2001)『韓国語上級表現ノート』, 東京:明石書店.
국립국어연구원(1999)『표준국어대사전』, 서울:두산동아.
김광해(1995)「조망 —국어에 대한 일본어의 간섭」,『새국어생활』5-2, 서울:국립국어연구원.
배주채(2003)『한국어의 발음』, 서울:삼경문화사.
서재극(1970)「개화기 외래어와 신용어」,『동서문화』4, 대구:계명대학교 동서문화연구소.
엄태수(2013)『표준어의 음운현상에 대한 연구』, 서울:박문사.
이한섭(2014)『일본어에서 온 우리말 사전』, 서울:고려대학교출판부.

【附記】調査に快く協力してくださったインフォーマント諸氏には茲に深謝申し上げる. また, 本研究は, 平成 25-26 年度科学研究費若手研究(B)(研究課題番号:25770151)「現代朝鮮語における〈濃音化〉の総合的研究」の成果の一部である.